

音楽の流れの中における幼児のリズム認知とリズム表現

～幼児曲を使った実践を踏まえて～

Young children's rhythmic cognition and rhythmic expression in the flow of Music

～Based on practice with infant songs～

菅原 美 謝

Misa Sugawara

横 溝 聡 子

Toshiko Yokomizo

深 谷 悠里絵

Yurie Hukaya

This study is interested in determining if the musical activity of perception and expression is enhanced when rhythm has or does not have accompaniment. Our cohort consists of children in three age groups 3,4 and 5 years of age. We looked at four elementary rhythmic patterns to determine the difference in the cohorts perception of rhythm. In addition, we looked for relationships between rhythm and accompaniment across the age spectrum. The results show that both technical and environmental aspects influence the perception of rhythm.

I はじめに

幼稚園教育要領において音楽は領域「表現」の中に含まれており、内容(6)では「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」とあるように、保育の現場では様々な音楽表現活動が行われている。解説に「教師などの大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、幼児が音楽に親しむようになる上で、重要な経験である。このように、幼児期において、音楽に関わる活動を十分に経験することが将来の音楽を楽しむ生活につながっていくのである。」¹⁾と書いてある通り、楽器に触れ簡単なリズムを叩く「楽器遊び」からリズム楽器を用いたリズム奏「合奏」まで経験させることが大切であろう。

本来人間にはリズムを認知する能力がある。梅本は広い視点から「人間が環境世界に適応して生存していくためには、環境世界の事物や事象の変化のリズムに自らのリズムを合わせていかねばならない。そのためには変化の時間の長短を知覚し、自分の行動の時間的な変化を調節する必要がある。このことはすなわちリズムの知覚であり、リズムの同期である。それらは環境世界に適応するための基本的能力である。生物が環境に適応する基礎にはリズム同期があるといえよう。～中略～人間同士が互いにリズムを合わせてこそ社会生活ができるのであり～中略～このような能力は生得的に人間に備わっているのではないか。」としている。また、「リズ

ムの同期は乳児から成人の生活にとっても本質的なものであり、掛け声は、複数の力がリズムを合わせれば強力なものになり、労働における協力のはじまりと本質的に関連している。」²⁾と述べている。このことは、アンサンブルにおける相互作用を連想させる。

また、梅本は「何よりも音楽は子どもにとって遊びの一種である～中略～音響それ自体が好奇心の的～中略～言葉のイントネーションはともすれば遊びになり、歌となる。」³⁾と述べている。実際子どもたちに楽器を配るとすぐに打ち鳴らし、細部に至るまでどんな音が出るのか試す姿がある。「いただきます」や「ごちそうさまでした」の挨拶にもリズムをつけて発する様子があり、梅本が述べていることはこれらと重なる。宮崎はオルフの音楽教育について、言語である話しことばをリズム化して音楽教育の導入の素材に活用することで、「無理なく生きたリズムを学べる」「ことばの持つリズムから多くのリズムパターンを体得できる。」⁴⁾と述べている。このように日常的に用いていることばですら遊びにになってしまう子どもの遊びの幅は広く、子どもの持っている潜在的な音楽認知能力は豊かであるといえよう。

幼児の音楽的発達について、徳田は、単純なパルスへの同期は3歳頃からできるようになり、年齢が増すにつれ次第に早く、巧みに同期できるようになると述べている⁵⁾。水野らの音楽に併せて打つ手拍子の同期度記録解析によると、幼児はまず旋律のリズムの特徴を直感的に感じ、その後拍節構造の理解とともに旋律と拍を階層的に捉え、等間隔の拍を知覚するようになると述べている⁶⁾。持田もリズムを図で表す実験で3歳児はリズムを感じる時期であり、4歳児はリズムに気づき象徴的に表しはじめる時期、5歳児ではある程度リズムパターンを理解し表せるようになると分析している⁷⁾。佐々木は、速いテンポ、遅いテンポで時間間隔を認知し動作へと変換していく作業は、幼児にとって動作に対する定位が不十分で困難である。また動作遂行について、一定のリズムで運動を継続する場合の連続した動作の恒常性は3、4、5歳と増していき、5歳頃には定位された動作の遂行においては安定性があると述べている⁸⁾。

このように幼児にはリズム感覚はある程度備わっており、テンポの捉え方、リズム同期には運動動作などの様々な要因が関係していることがわかる。現場の自然な音楽活動環境は、音楽(伴奏)の流れの中で、リズム楽器を使用して一斉保育の中での活動になる。では、集団でのリズム表現ではパターンの同期や認知はどう捉えられ表出されているのだろうか。

保育の現場では、「楽器遊び」を導入として「合奏」まで発展させたいと考えているが、保育者にとっては課題が多い。楽器に触れる遊びのその先の適切なアプローチが分からず展開できずにいる実情や、子どもに無理のないリズムが何かわからないため技能的な練習ばかりに陥りがちな現状がある。導入段階の「楽器遊び」は伴奏があったとしても伴奏に合わせて継続してリズムを奏することはほとんどないが、「合奏」では伴奏に合わせて継続してリズムを奏する。保育者にとって伴奏の流れに合わせるための子どもへの働きかけが難しい現状がある。

「合奏」では複数で伴奏に合わせてリズムを打つことは必須で、仲間と一緒にリズムパター

ンの組み合わせを継続して奏する。筆者は、長年幼稚園での指導や教材開発を行ってきた。それらの活動を通してリズム表現について考察していく中で、伴奏の流れに合わせた時とリズムのみの時では、幼児にとって同じリズムでもリズムの捉え方に違いがあると感じている。現状を踏まえて課題を解決していくには、伴奏の流れの中での子どもとリズムの関係を知ることが重要である。

このことから、本稿では、複数の人数(集団)の中でのリズム表現に着目して検証する。4種類の初歩的なリズムパターンを用い、伴奏なしでリズムのみを奏する場合と伴奏に合わせてリズムを奏する場合では、リズムの捉え方に違いがあるのか明らかにする。またリズムへの反応を観察し、年少、年中、年長の学年ごとの子どものリズム反応から集団の中での同期や反応の過程をみる。それらの特徴や発達の違いを分析し、音楽(伴奏)の流れとの関係を探ることを目的とする。リズム反応への発達や特徴を理解することは、子どもへの働きかけの視点が定まり発達を踏まえた楽器活動の一助になるのではないだろうか。

Ⅱ 研究方法

1 対象者と検証日

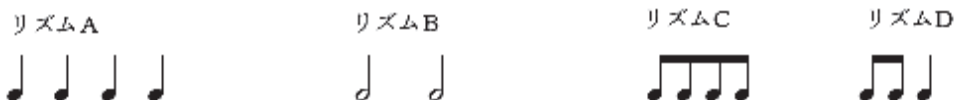
福島県郡山市内の幼稚園園児。年長児27名、年中児28名、年少児31名を対象とした。

調査は令和4年7月11日(年中)、13日(年少)、8月18日(年長)に幼稚園のお遊戯室で行った。この幼稚園では週に一回40分の課外音楽教室が行われており、対象園児の約半数が受講している。

2 検証方法

対象児は4～5つのグループに分かれて行う。1グループずつお遊戯室のステージに上がり、各園児はあらかじめ床に貼られた番号が書かれた目印の場所に立つ。園児の前方よりビデオ録画をする。人間には本来リズムがあり、まず拍を打つのが基本であることから、四分音符のリズムA、次に音と音の間隔が長くなる二分音符のリズムB、八分音符のリズムC、そしてCの後半の音価が変化した八分音符と四分音符のリズムDを叩いてもらう。(譜例1)

譜例 1



1. リズムパターンの手本(ことばを言いながら叩いて見せる)を示してから、そのリズムを8回以上伴奏なしでリズムのみ叩かせる場合と、その後に伴奏に合わせて叩かせる場合とで検証する。Aの時は「トントン」Bの時は「ゆっくりー」、Cの時は「じゃがいも」、Dの時は「うさぎ」とことばによるリズム認知の補助を行った。これは、年少・年中・年長全てのクラスで同様に働きかけた。
2. 子どもへの音楽刺激はピアノ伴奏で行い、曲は「みつばちマーチ」(外国曲)冒頭から8小節を使用する(譜例2)。「みつばちマーチ」は耳馴染みのある曲であり、メロディーに付点のリズムが無く拍が捉え易いと考え選曲した。
3. テンポはAB ♩ =90、年少児 ♩ =80、CD ♩ =70、年少児は ♩ =60で行う。
発達段階に合わせるため、年少児は遅いテンポを設定した。
4. 手拍子で継続してリズムを叩くのは幼児には難しく音量の面でも測定しづらい為、子どもにとって扱い易い楽器であるタンブリンを使用する。
5. 集中力を引き出し持続させるため、年少児、年中児へは子どもたちから離れた前方で、先生と一緒に叩く動作を示す。
6. 記録は、補助の教員が観察してチェック表に記入したが、録画したものを後日確認して最終的に判断を行った。また、録画したものを観察し反応を分析した。観察による検証であるため限界はあるが、集団での子どもの反応から解釈できることは有効であると考えている。
7. リズムを叩けるかどうかを、伴奏あり・伴奏なしのそれぞれであてはまるもの1つに丸を付けた(資料1)。項目は以下の通りである。
 - ・全く合っていない
 - ・リズムになっているようにも感じる
 - ・時々合っている
 - ・拍を捉えて継続して叩ける(4回程度)
 - ・拍を捉えて継続して(8回程度かそれ以上)

譜例2

みつばちマーチ



資料 1

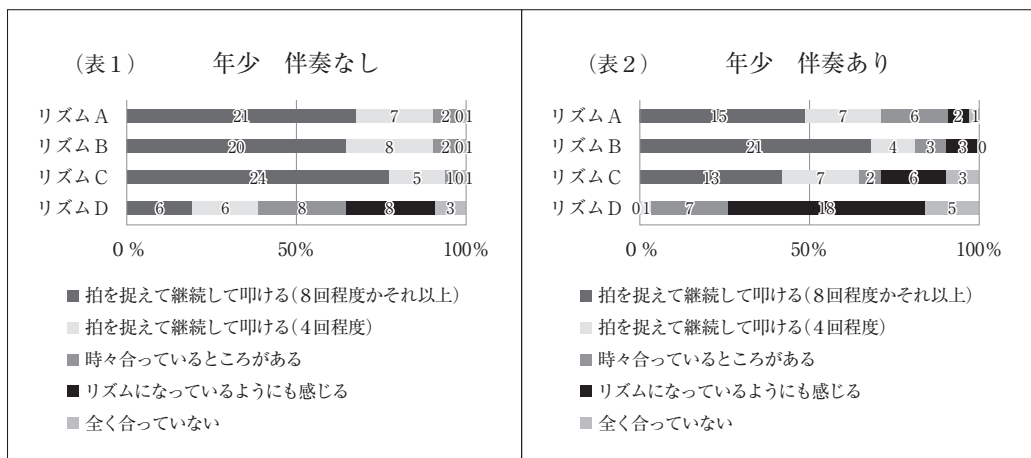
同期の程度 園児	1		2		3		4		5		6		7
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
全く合っていない													
リズムになっているように感じる													
時々合っているところがある													
拍を捉えて継続して叩ける(4回程度)													
" (8回程度かそれ以上)													

Ⅲ 結果

1 同期の結果

(1) 【年少】

年少の31名を4つのグループに分けて検証を行った。(表1、2)



リズムA: ♩ ♩ ♩ ♩


伴奏なしでは、8回以上継続して叩くことができた子どもは68%、4回程度継続できた子どもは23%で、合わせて91%となった。

伴奏ありでは、48%の子どもが8回以上継続することができ、4回程度継続できた子どもは、伴奏なしの時と同様に、23%となった。合わせて、伴奏ありの場合は、71%にとどまった。

リズムB: ♩ ♩


伴奏なしでは、8回以上継続して叩くことができた子どもは65%、4回以上継続できた子どもは26%となった。合わせて91%という結果となった。

伴奏ありでは、8回以上継続して叩くことができた子どもは68%、4回程度継続できた子どもは13%で、合わせて81%だった。

リズムC： 

伴奏なしでは、8回以上継続して叩くことができた子どもは77%、4回程度継続できた子どもは16%、合わせて93%となった。

伴奏ありでは、8回継続以上継続して叩くことができた子どもは42%、4回程度継続できた子どもは23%で、合わせても全体の65%に留まった。

リズムD： 

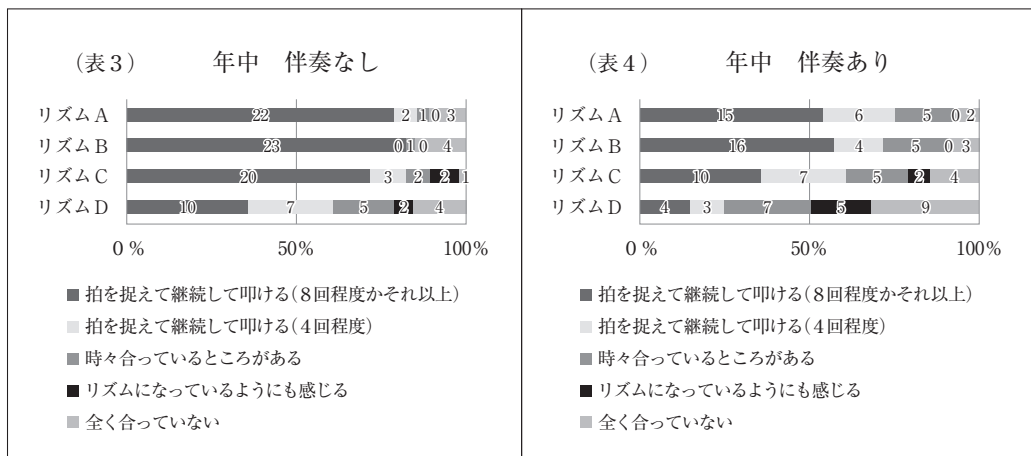
伴奏なしでは、結果は8回以上継続して叩くことができた子どもは19%、4回程度継続できた子どもは、同じく19%で、合わせても38%に留まった。

伴奏ありでは、8回継続以上継続して叩くことができた子どもは0名、4回程度継続できた子どもも、1名のみの結果となった。

同じリズムが連続するABCについては、比較的できた子どもが多く、伴奏ありとなしの場合の両方で、60%以上70%に近い数値が表れている。リズムBの伴奏ありの場合以外は、どのリズムでも多数ではないが「全く合っていない」子どもが少数いることがわかる。「全く合っていない」「リズムになっているようにも感じる」に該当する子どもは、伴奏ありの方がその傾向が高まっていることがグラフからも読み取れる。

(2) 【年中】


年中28名を4つのグループに分けて検証を行った。(表3、4)



リズムA： 


伴奏なしでは、8回以上継続して叩くことができた子どもは79%、4回程度継続できた子どもはわずか7%で、合わせて86%となった。

伴奏ありでは、53%の子どもが8回以上継続することができ、4回程度継続できた子どもは21%となった。合わせて、伴奏ありの場合は、74%の結果となった。

リズムB: 


伴奏なしでは、8回以上継続して叩くことができた子どもは82%、4回以上継続できた子どもは1人もおらず、全くあっていない子どもは、14%という結果となった。

伴奏ありでは、8回以上継続して叩くことができた子どもは57%、4回程度継続できた子どもは14%で、合わせて71%に留まった。

リズムC: 

伴奏なしでは、8回以上継続して叩くことができた子どもは71%、4回程度継続できた子どもは11%、合わせて82%となった。

伴奏ありでは、8回継続以上継続して叩くことができた子どもは36%、4回程度継続できた子どもも25%で、合わせて61%に留まった。

リズムD: 

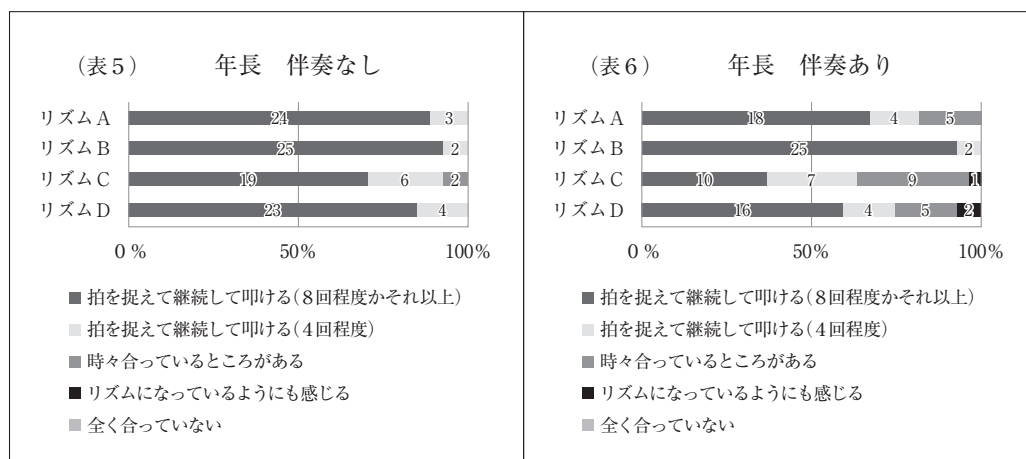
伴奏なしでは、8回以上継続して叩くことができた子どもは36%、4回程度継続できた子どもは、25%で、合わせて61%に留まった。

伴奏ありでは、8回継続以上継続して叩くことができた子どもは14%、4回程度継続できた子どもは11%で、合わせて28%となった。

ABCのリズムで、伴奏なしの場合は80%を超える子どもたちが8回以上継続して叩くことができている。伴奏ありの場合は、ABのリズムでは70%を超える子どもたちが8回以上継続して叩くことができたことがわかり、叩きやすいリズムだということが読み取れる。一方で、どのリズムパターンでも、「全く合っていない」に該当してしまった子どもが3~32%いたことがわかる。リズムCDでは伴奏なしから伴奏ありになると、8回以上継続して叩くことができる子どもは半減もしくは半減以下になり、「全く合っていない」に該当してしまう子どもは、伴奏なしでは大きな変化はないが、伴奏ありで増える傾向にある。どのリズムパターンでも、伴奏なしのほうが、8回以上や4回程度継続して叩ける子どもたちが多い。

(3) 【年長】

年長児の27名を4つのグループに分けて検証を行った。(表5、6)



リズムA: ♩ ♩ ♩ ♩

伴奏なしでは、89%の子どもが8回以上継続して叩くことができている。また、リズムを捉えて4回程度継続して叩ける子どもを加えると、全員が継続してリズムを叩くことができている。

伴奏ありでは、66%の子どもが8回以上継続することができ、4回程度継続して叩ける子どもを加えると81%ができている。

リズムB: ♪ ♪


伴奏なしでは、92%の子どもが8回以上継続して叩くことができ、4回以上叩くことができる子供も加えると全員が継続してリズムを叩くことができている。

伴奏ありでも、8回以上継続して叩くことができた子どもは92%、4回程度継続できた子どもを合わせると全員が継続してリズムを叩くことができている。グラフには表れていないが、伴奏があった方が8回以上叩けた子どもと、伴奏があると4回程度になった子どもとが1名ずついた。

リズムC: ♪ ♪ ♪ ♪

伴奏なしでは、8回以上継続して叩くことができた子どもは70%、4回程度継続できた子どもは22%、合わせて92%となった。

伴奏ありでは、8回継続以上継続して叩くことができた子どもは37%、4回程度継続できた子どもも26%で、合わせても全体の63%に留まった。時々合っているところがあるに該当する子どもが全体の30%に増えている。

リズムD: 

伴奏なしでは、8回以上継続して叩くことができた子どもは85%、4回程度継続できた子どもと合わせると全員が継続してリズムを叩くことができています。

伴奏ありでは、8回継続以上継続して叩くことができた子どもは59%、4回継続できた子どもも15%で、合わせて全体の74%が継続してリズムを叩くことができています。

どのリズムも、リズムのみではリズムパターンを継続して叩くことができています。伴奏に合わせた場合でも「全く合っていない」子どもはいない。

2 反応と分析

(1) リズムA

年少は、伴奏なしでは、先生の手本を模倣して上手に叩くことができていた。伴奏ありでは、メロディーのリズムに合わせて止まる(のぼす)反応が見られた。これは伴奏をよく聴いている、歌う時のようにまず旋律が耳に入りやすい、フレーズを感じている、ともいえるのではないかと。「全く合っていない」子どもは、手を動かして叩いてはいるが音と音との間隔をとらえて叩くことができない。しかし、隣の子どもの手元を見て模倣しようとする姿がみられた。

年中は、伴奏なしでは、1名に拍を捉えられない反応がみられたが、その他は拍を捉えて叩いていた。周囲の音のずれが気になりながらも、自分のペースで正しく叩ける反応がみられた。自分のテンポ感が体の中に出てきたとも言える。伴奏ありで、メロディーのリズムに合わせて止まる傾向は少数だった。

年長は、伴奏なしでは、継続して叩くにつれて全体のテンポがだんだん速くなった。テンポが少しずつ速くなる子どもに周り子どもたちが合わせる、その結果集団のテンポが速くなる反応がみられた。これは年少、年中児には見られなかった反応である。周囲に合わせるための耳が育っているといえる。この時、周り子どもたちには、テンポが少しずつ速くなる傾向の子どもを察知してそちらに視線を向け、戸惑いながらも合わせようとする姿がみられた。周囲の音をよく聴いているといえよう。テンポを乱す子どもにただつられているのではなく、音を聴き、仲間に合わせながら叩いている。うまく合わせて皆で一つのリズムを作り上げようとする気持ちがあるのではないかと推察する。音楽に協調性が出ていると考える。伴奏ありでは、一人の子どもがメロディーのリズムと同様に叩いたことをきっかけに、次々メロディーのリズムに変化してしまう連鎖反応がみられた。心理的な影響だと推察する。リズム認知の説明を丁寧に行うべきだったと考える。メロディーのリズムにつられて叩く子どもは年少から年長までいたが、学年が進むにつれてこの傾向は減少した。

(2) リズムB

年少は、手本を叩いて見せるとすぐに認知して模倣していた。腕の動きや体を揺らして感覚的にリズムを捉える反応は、伴奏ありにもみられた。伴奏ありでは、リズムだけではリズムの音価やテンポが捉えられなかった子どもが、隣の子どもの手元を模倣して拍を捉えはじめ、「リズムになっているようにも感じる」の反応がみられた。その結果、リズムBの伴奏ありでは「全く合っていない」子どもは0人だった。リズムの捉え方には聴覚での捉え方の他に、周囲の動作の模倣という視覚的な捉え方や、体を使って間隔（音価）や拍節を感じてリズムをとる運動的な捉え方がみられ、様々な要素が関係しているといえる。仲間の集団の中で、様々な刺激を受け音楽的に発達していくことを示している。

年中は、伴奏なしと伴奏ありの両方で、音価を捉えるのに腕を大きく上下に動かす反応や、叩いてから空中で空振りさせる動きの組み合わせで音価を捉える意図的な動作が見られた。集団のリズムに一体感があったのは、音価の認知ができてきて個人の同期の精度が高まってきたためと推察する。伴奏ありでは、途中から四分音符のリズムに変化してしまった子どもと、それにつられて叩く子どもがみられた。また自己流のリズムに変えて叩く子どももいたが、それも持続できず伴奏に合わなくなってしまう姿からは、集団のリズム表現では自己中心的な捉え方はまだあるといえる。しかし、拍を捉えながらリズムを変えるのは、音楽的発達がみられるといえる。この反応からは、叩きやすいリズムにもかかわらずリズムパターンの持続ができないのは、リズムに退屈したためとも推察できる。

年長は、伴奏なしと伴奏ありの両方で全員が継続してリズムを叩けており、同期精度の高さから、子どもにとって叩きやすいリズムであるといえよう。伴奏ありでは、四分音符のリズムやメロディーのリズムを叩く子どもが若干名いたが、周囲への連鎖反応は全くなかった。咳や痒みなどで数小節中断してもすぐに戻れるなど、伴奏も含めて音楽をよく捉えていた。

(3) リズムC

年少は、伴奏なしでは同期の精度は多少低い。上手に叩けている子どもは、腕の動きが一定で安定していた。伴奏ありでは、メロディーのリズムに合わせて止まってしまう、途中から四分音符のリズムで叩くといった反応がみられた。周囲に合わせる力は低く、集団の音楽の中では自己中心的な捉え方が大きいと感じる。「全く合っていない」に該当した子どもは、腕の速い動きができず、遅くなってしまう反応がみられるとともに、一曲を通して小刻みに叩いたりゆっくり叩いたりといった動きが気ままに出現する反応がみられた。運動機能の発達も影響しているのではないかと考える。

年中は、伴奏なしでは、多くの子どもがリズムを捉えて継続して叩いていた。継続できなかったのは集中力が切れて中断してしまった子どもたちである。伴奏ありでは、拍を捉えられ

ず小刻みに叩く反応は3名にみられた。メロディーのリズムに合わせて止まる、四分音符のリズムで叩くなどの子どもがいる一方で、周囲につられず伴奏に合わせて自分のテンポで叩ける子どももいた。拍感覚が身につき始め、自立してきたと推察する。

年長は、伴奏なしでは、集団のテンポを捉えようとする姿がみられ、継続していくうちに集団で揃ってテンポが速くなった。伴奏ありでは、集団のリズムが乱れる傾向だったが、その中でも「継続して叩ける」に該当する子どもは前述の通りで、周囲につられず伴奏をよく聴いてテンポに合わせて叩ける反応がみられた。自分のテンポやリズムを保ち続ける力が備わっていると考え。また、「時々合っているところがある」に該当する子どもが伴奏ありでは増えている。曲頭から伴奏とリズムを捉えるまで長い時間がかかり、連打しながら拍を探り、曲の最後に数回合う反応と、曲頭は伴奏と合っているが気ままに連打する子どもの大きな音につられてリズムを見失う反応がみられた。「時々合っているところがある」「リズムになっているように感じる」に該当した子ども10名全員に拍を捉えられず小刻みに速打ちする反応がみられた。拍を探る際に連打しながら探す傾向にある。

小刻みに叩く反応は全学年にみられた。またリズムCを速いテンポで長く継続することは、幼児にとって腕の運動機能としての動きに若干無理があるように感じられた。手首を使って軽く叩くことができないため、腕全体を使って腕や肩に力が入ってしまう傾向があり、長時間にわたる継続した動きに疲労してしまう。また、「速い」という印象から、ただ速く必死に叩こうとする子どももいた。

(4) リズムD

年少は、伴奏なしでは、保育者が「うさぎ」という言葉で認知補助を行っても、八分音符のリズムC「じゃがいも」で叩く子どもが多かった。直前に行ったリズムの影響もあったと推察する。4回以上継続して叩けなくても、少数だが2回継続して叩ける反応もみられた。伴奏ありでも「じゃがいも」の八分音符のリズムで叩く子どもが多く、正しいリズムを継続して叩き続けることができた子どもは0人だった。伴奏の左手分散和音につられ、どんなリズムか見失ったとも考えられ、音の間隔の長短を捉えることが出来ていないといえよう。そのほか、八分音符のリズムから次第に四分音符のリズムで叩く反応や、「うさぎ」を素速く叩き、その後待つ反応があった。このことは、音の間隔の長短への反応と考える。この様に、ことばでの認知補助を行っても、年少児にとって、待つことや音価の変化にすぐに反応するのは難しいと思われる。年少の子どもにとって、難しいリズムだったことが結果として見えてきた。

年中は、伴奏なしでは、長い音符のところで指先を楽器に長く落として間隔を取る反応や、指先を楽器から離して休符のように捉え、音の間隔の長短に反応している動作がみられる。四分音符の長さを待つのがこのリズムの特徴であるが、動作では四分音符を1個に捉えるのでは

なく、八分音符2個に分化させる反応もあり、子ども自身で感じ取っていると考えられる。「継続して叩ける」に該当する子どもは61%だった。しかし、伴奏ありでは28%に減り、「じゃがいも」のリズムになる反応が多くみられた。伴奏に引っ張られて、惑わされてしまうことが考えられる。「全く合っていない」に該当した子どもも増えている。該当した子どもの反応は、楽器を持っているが参加しない、中断する、勝手に音を出す、楽器で遊ぶなど、リズムを難しいと感じたのか集中力が途切れて、リズムに興味を持つ様子がみられなかった。そのほかの反応は、八分音符で叩く、四分音符で叩く、八分音符で叩いていてその後四分音符に変わる反応などで、音の間隔の長短を感じている反応はみられない。このリズムパターンは、長さの異なる音符の組み合わせで成り立っているという事に気づけていないと推察される。リズムと伴奏の拍を合わせるのが困難な傾向だった。「時々合っているところがある」に該当した子どものうち5名は、2回は連続して叩けていた。その後、伴奏につられて八分音符で叩き続ける、四分音符で叩き続けるなどの反応がみられた。四分音符の扱いに混乱してしまう反応では、四分音符が時間的に長いという認識はあるが、伴奏に惑わされて1拍待たずに先走ってしまい、リズムの拍頭がずれて伴奏に合わなくなる反応がみられた。

年長は、伴奏なしでは同期精度が高い印象を受けた。集団の音をよく聴き、リズムの拍頭と2拍目の四分音符の長さも揃っていて、リズムの特徴を理解している。伴奏なしで継続して叩ける子どもの学年ごとの比較は、年少38%、年中61%に対し、年長は100%となっており、リズム認知がされている結果だと考える。伴奏ありでの比較は、年少0%、年中28%、年長74%となる。伴奏ありでは、音の間隔の長短が捉えられない傾向があった。また、2拍目の四分音符で待つところは、八分音符に分化させる動作も少数だがみられた。継続してリズムを叩けない子どもは26%で、1拍目の八分音符が伴奏と合わせられない反応や、1拍目の八分音符で小刻みに連打する反応(少数)と、伴奏とリズムの拍を合わせる模索から脱して拍に乗れるようになったとみられる子どもは、八分音符で叩く反応があった。

IV 考察

検証結果から伴奏の流れに合わせてリズムパターンを叩く時、指定されたリズムで叩き続けることがやや難しくなることがわかった。しかし、指定されたリズムが叩けなかった子どもも、四分音符単位や直前に行ったリズム、メロディーのリズム通りに叩いていたケースは多くみられた。このことは全くリズムを感じていないわけではなく、逆に伴奏をよく捉えて音楽を感じているとも考えられる。繰り返しのリズムABは比較的伴奏に合わせやすい。繰り返しのリズムCは、運動機能の要素もあり、やや合わせづらい。長さの異なる音符の組み合わせのリズムDはさらに伴奏に合わせることが難しかった。長短の音価を理解し間隔を捉える認知が関係し

ており、リズムパターンの拍を認知できないと伴奏と合わせづらいことが明らかになった。また、伴奏に惑わされて2拍目の四分音符で止まることが難しい。

リズムパターンの特徴は以下の通りであった。

- ・リズムAは、テンポが不安定になり、速くなりやすいことが分かり、伴奏に合わせた方が安定することも見えてきた。拍を刻むリズムであり、子どもが無理なく受け入れられるので、伴奏に合わせて十分リズムに親しむことができる。メロディーのリズムにつられやすく、つられた子どもは年少から年長までいたが、学年が進むにつれてこの傾向は減少した。
- ・リズムBは、リズムを叩きやすく伴奏にも合わせやすい。しかし、それゆえに継続していくうちに退屈しやすいことも見えてきた。子どもに合わせた退屈しないための工夫が必要である。
- ・リズムCは、運動機能の面も関係して、同期精度は低い傾向にあるため、周囲の音からリズムやテンポを捉えづらい。運動機能について佐々木は、幼児にとっては500msecより短い時間間隔での動作の遂行は定位が不十分で困難であると分析している⁸⁾ (500msecは0.5秒でメトロノームテンポ120に相当する)。また、幼児の打叩動作調整の発達には、動作パターンが一定せず「課題の定位が十分ではない」、定位と遂行のずれの認識はあるが修正できず「課題の定位に基づく自己の運動設計がなされない段階」、「個々のプログラミングにもとづく動作遂行がなされる段階」⁹⁾がみられると述べている。このように定位や動作コントロールが要因となり、リズムCはばらつきが出やすいと考えられる。伴奏をよく聴いて自分のテンポを意識させることが大切である。また、長く継続すると疲れて崩れる原因になるため、長く継続して叩かせないようにする。
- ・リズムDは、リズム認知は学年が進むにつれてできるようになる。年少児はリズムCと混乱してリズムを捉えづらい。2拍目の四分音符で止まることを認知するには、丁寧な働きかけと「ことば」をつけるなどの工夫の必要がある。

また、反応と分析から、伴奏の流れに合わせるには、伴奏とリズムパターンの拍を認知してテンポを揃えることが大切であることが見えてきた。一見、気ままに叩いているようにみえたり小刻みに連打をしている子どもの姿は、「音価を模索中」の姿であると考えられ、拍を捉えられていないと推察する。ここで「子どもにとって音楽(伴奏)の流れに合わせるとは何なのか」を考える時、子どもの目線に立ち返りもっと単純に考える事が必要であろう。子どもは音楽(伴奏)に「合わせる」ことを、長い音価の音は「待つ」と短い音価の音は「進む」で表現しているのかもしれない。単純に「待つ」「進む」をしながら子どもは音楽の流れの道を進んでいるだけと考えることができる。それを音楽の制約や決まりに当てはめていけば良いのだ、

とすれば、まず拍を捉えることからリズム表現はスタートする。子どものリズム表現で、拍を捉え易く感じるには、伴奏との関係も大切である。使用する曲や伴奏型は、子どもの発達や反応に合わせて働きかけを変容させて、柔軟に対応することが必要だといえる。

学年ごとのリズム反応への発達の特徴と、そこから導き出される保育者の子どもへの必要な働きかけをまとめる。

- ・年少児は、自己中心的で集団を意識していないため、周囲と合わせる力は低い、目の前の音楽を感じている。模倣を通して規則的なリズムに触れていくことでリズム感が養われていく。よって、同じ速さで奏することを意識させるよう働きかける事が大切である。子どもは仲間からの刺激を受けてテンポを合わせられるようになり、音楽に合わせたリズム表現は、集団の中で仲間や保育者を模倣することによって成り立っている。集団で、自己中心的な音楽性で「同じ速さで奏する」ことを楽しむ時期は、伴奏はテンポを刻むような工夫が必要である。
- ・年中児は、自分のテンポ感が体の中に芽生えてきて、自立しはじめる。音の間隔の長短を感じて表現できる。また、拍感覚が身についてくる時期で、子どもは仲間の音に助けられながら、次第に頭と体でリズムパターンと伴奏の関係を理解していく。音楽に合わせたリズム表現は、集団の音の中でリズムパターンを伴奏にはめ込むことで成り立っている。よって、楽しみながらいろいろなリズムに触れさせ、リズムパターンの拍頭を合わせることに気づかせるような働きかけが望ましい。テンポやリズムが自立しはじめて「リズムパターンの拍頭を合わせる」時期は、伴奏は子どもを楽しませ拍知覚を刺激する伴奏型が望ましい。
- ・年長児は、全体の音を聴ける耳が育ち、協調がみられる。自身を集団の中の一人と捉え、伴奏や仲間とリズムを合わせようとする。また、リズム認知がしっかりされて、自分のテンポやリズムを保ち続ける力がみられる。音楽に合わせたリズム表現は、仲間との調和で成り立っている。よって、周囲(全体)の音を聞く大切さを意識できるような働きかけが有効であると考えられる。音楽性に協調がみられ、「周囲(全体)の音を聞く大切さ」を意識するこの時期は、伴奏に子どもの音楽性に寄り添い支える存在となるような伴奏型や表現を用いると、子どもの自発的な表現を引き出せることができるであろう。

子どもは、保育者の手本など外からの働きかけから刺激を受けてリズム表現することを始め、集団の中からさまざまな刺激を受け、適応し、多角的に模倣をしながら音楽的に育っていく。子どものリズム表現は、保育者が日々の保育の中の音楽活動で、子ども自身が音楽を感じて自然に表す反応を受け止め、それを音楽の制約や決まりのあるリズムを扱う楽器活動に近づけることが望ましい。また、保育者が幼児にとってのリズム表現のし易さを考慮することで、子ど

もが興味を持って活動し、表現する喜びを感じるのではないかと推察する。

V まとめ

伴奏の流れに合わせてリズムパターンを叩く時、指定されたリズムで叩き続けることがやや難しくなり、伴奏とリズムパターンの拍を認知してテンポを揃えることが大切であることが明らかになった。伴奏が子どものリズムの捉え方を整える役目を果たすことで、子どもはリズム表現をし易くなる。集団で伴奏に合わせる時、年少は「自己中心的な音楽性」、年中は「自立しはじめの音楽性」、年長は「協調のある音楽性」でリズム表現していることがわかった。これらのリズム反応の特徴や発達の違いを踏まえて活動することで、子どもの自発性と保育者の働きかけがバランスよく作用して子どもの表現力にさらに磨きがかかり、新たな展開を生み出せるのではないかと考える。今後も子どもたちとの活動の中から子どもの音楽の発達と、子どもの可能性を追求していきたい。

謝辞

検証の実施にあたり、ご協力をいただきました園児の皆様と先生方に深く感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 文部科学省、幼稚園指導要領解説、240頁、フレーベル館、2018
- 2) 梅本堯夫、子どもと音楽、60-61頁、東京大学出版会、1999
- 3) 梅本堯夫、子どもと音楽、2頁、東京大学出版会、1999
- 4) 宮崎幸次、オルフの音楽教育～楽しみはアンサンブルから～、51頁、レッスンの友社、1995
- 5) 徳田久子、リズム反応の発達の研究―同期を手がかりとして―、体育学研究、15巻2号69-80頁、1971
- 6) 水野伸子・津田実、幼児期における拍知覚の発達―拍への同期度による検討―、音楽教育学49巻2、11頁、2020
- 7) 持田京子、幼児の音楽リズムの捉え方の発達―「リズムの図式」から―、埼玉純真短期大学研究論文集、第11号、57頁、2018
- 8) 佐々木玲子、子どものリズムと動きの発達、バイオメカニズム学会誌、vol.36 No 2、75頁、2012
- 9) 佐々木玲子、動作パターンから見た幼児の打叩動作調整の発達、慶應義塾大学体育研究所紀要、vol.30 No 1、46頁、1990

参考文献

- ・永野重史、発達とはなにか、東京大学出版会、2001
- ・岡野満里・丹羽劭昭、幼児のリズム・パターンへの同期に関する発達的研究、体育学研究20 巻4号221-230頁、1976
- ・水野伸子、生演奏とDVD再生演奏による音楽聴取時における手拍子同期の解析比較、音楽教育学47巻2号13-24頁、2018
- ・竹村壽美子、保育における表現の問題ー「表現活動：音楽」の実践を通してー、四天王寺国際仏教大学紀要 第44号275-293頁、2007